

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800807		
法人名	社会福祉法人 蘇南会		
事業所名	グループホームすみれ		
所在地	熊本県上益城郡山都町北中島2679-3		
自己評価作成日	平成23年9月22日	評価結果市町村受理日	平成23年11月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成23年10月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

自然環境豊かで、ホームの共有スペースは狭いが戸外の環境を日常的にケアに生かすことができる。また、職員は個々の利用者を理解することで、利用者の力や得意なことを日常生活にスムーズに生かすように努めている。職員のほとんどは介護福祉士取得し、質の高いケアに努めている。家族会も協力的で、季節の野菜や果物その他の食品の差し入れなど、日常的に気軽にされる関係がある。複合施設の利点を活かし、関連施設へ移られた場合にも、流れのある支援が可能であり、職員も努力している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

二つの法人が運営するグループホームを含む様々な高齢者施設は、お互いに連携し地域の中で確固たる存在を築いている。法人の社会還元は、地元の人材雇用や、行政が主導する「認知症の家族会」への参与、利用料金の設定に表れ、働く職員を支援する保育施設の充実により、グループホーム職員も同敷地内で過ごす子供を確認しながら職務に専念している。全員が常勤雇用という恵まれた体制の中で、異動の少ない環境にあり馴染みの職員による継続した支援が実現している。今年度は一人ひとりの入居者を多角的に見つめ、心の奥にあるものを引き出しながらプラン作成をしていると語るホーム長は自らも昼、夜を問わずケアに入り現状把握に努めている。入居者は自然に囲まれ生活環境の整ったホーム内で同居する小動物と共に生き生きと過ごし来訪者を温かく迎えている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員全員で作上げた理念があり、常に念頭において、実践している。	開所後全職員が関わり作りあげた理念であり、ホーム長からみても「個々の心構えの中にしっかり定着している」と語っている。理念をホーム内に掲示し日々のケアにすり合わせながら実践に繋げている。入居者に継続した支援が出来る様職員の入れ替わりはほとんどないが、法人内の異動により入職した職員へも管理者は理念を基に認知症ケアについて話をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議等を活用して、地域の行事や活動に参加し、できる限り交流を深めているが、日常的な交流とは言えない。	運営推進会議で地域の祭りや行事をリサーチし入居者は職員と共に出かけている。社協主催の“お達者会”へ参加しグランドゴルフ開催時は、会へホーム前の広場を提供している。民生委員からの情報により朝顔の花見学に出かけ、様々な地域行事へ場所提供をしたり、地元商店からの食材の配達やボランティアの来園等も支援している。	立地的には地域との日常的なかかわりは難しいと思えるが、推進会議参加者からも様々な情報がもたらされており、今後も入居者が地域の一員として外部と交流を持ちながら生活出来る様引き続き情報収集に努め、地元職員の気づきやアイデアにも期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域や団体の会合に参加し、認知症や認知症の人についての理解について話す等、事業所で培った知識や経験を地域に役立てるようになっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を通して、委員の方々には認知症についての理解を深めてもらっている。また委員とは地域とのパイプ役として、事業所運営や地域交流を深めるために連携し、サービスに生かしている。	運営推進会議は行政や地区代表者、家族等が参加し2か月ごとに定期的実施されている。全家族が参加出来る様、毎回違う家族が話し合いに加わり情報を共有している。事前の案内状に議題内容を明記し参加者からの意見や情報を収集している。	地元警察(駐在所)によるホームへの巡回が毎月行われており、推進会議の中で地域の防犯活動について話をしてもらおう機会を設定したり、参加者のそれぞれの立場から話を聞く時間を設ける事で更なる地域交流の足がかりとなる事を期待したい。又、来園者に向けホーム内に議事録の開示が求められる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議や研修その他、必要に応じて日常的に連携をとり、協力関係を築いている。	行政からの運営推進会議への参加や介護保険更新時の手続き、認定調査時の家族との立ち会い、入居申し込みに関する相談事など、行政との関係は友好であり、担当職員とも密に連携を図っている。ホーム長は「地域包括ケア担当者連絡会」での情報交換や、町が立ち上げた「認知症の家族会」で世話人として家族の悩みや相談に応じ、認知症に携わる一人として行政への一役を荷っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員は、身体拘束に関する行為について研修をしており、理解している。危険防止の為、裏口の施錠を短時間することはあるがそれ以外はしていない。	職員はホーム内研修にてどのような行為や言葉が拘束に当たるか具体的な例を出しながら話し合い、しっかりと認識を深めている。又外部研修に参加した職員の復講により内容を共有し拘束による弊害を全員が理解し日々のケアに当たっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は、虐待に関する研修をしており、認知症ゆえに、虐待が見過ごされることがないように、研修や日々、身体の傷や内出血等についても原因を追究するようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	全職員が各制度について十分理解しているとは言えないが、今後研修等を利用して学び、活用できるようにしていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約・解約時には、利用者・家族の思いを理解しながら、不安なく納得できる様な説明をしている。制度改正や報酬加算等についてもその都度説明して理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族会等で苦情・要望等を聞く機会を作っている。また、電話や面会時・苦情受付箱を利用して運営に反映させている。そのほか家族との会話や言葉から思いを汲み取り、ケアに反映させる様に努力している。	入居者が何でも言える雰囲気作りを心がけ、その方にあった声かけをしながら意見や要望を引き出している。家族へは普段の面会時や電話でのやり取り、年2～3回の家族会で意見を吸い上げホーム運営に生かしている。家族会の前後にはホーム周りの掃除や食事会等も予定されており家族との和やかな関係が構築している。	重要事項の中にホームの苦情、相談窓口を表記しているが、合わせて公的機関の表示も望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議の際、全員が遠慮なく自分の意見を言えるようにし、運営に生かしている。	毎月2回の会議でホーム長は職員の意見や提案を聞き、物品購入やケアの向上に繋がる支援等について改善が図られている。ホーム長は自らも昼、夜を問わずケアに入り、職員との日頃の会話を大切に管理者と共に人材育成にも力を注いでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	ホーム長始め、他の職員の業務に対する熱意・努力は認めている。職場環境等については職員会議で意見を聞き改善するようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外の研修には積極的に参加するように奨励している。また業務関係の資格取得には休暇を利用できるよう配慮している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県の宅老所グループホーム連絡会や上益城部会への参加、また町内の事業所とは日常的に連絡を取り合い、連携している。他事業所の良い面はお互いケアに生かすようにしている。		
II 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人と個別に面談する時間を設けて、本人の希望や思いを受け止めるようにしている。本人の見学や希望により体験等も受け入れ、入居前の関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とよく話し合い、家族の思いを受け止め、不安を取り除きながら、事業所や職員に対する信頼感を持ってもらえるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談状況を整理し、すぐに事業所で対応できない場合は、関係事業所や行政・ケアマネとの連携をとっている。初期のサービス導入では、本人・家族の思いを理解し、不安を最小限にできるよう柔軟なサービス提供に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	喜怒哀楽を共にし、人生の知恵や慣わしを日常的に話したり聞いたりしながら、共に支えあう関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	お便りや電話連絡、定期報告・日常の面会時に利用者の様子などを伝え、職員の思いを理解してもらい、また家族の思いも理解するようにしている。本人と一緒に支えあう関係づくりに努めている		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ふるさとへのドライブや入居前の行きつけの美容室へ行ったり、地域の行事・イベント等に参加し、顔なじみの人と会える機会を作っている。	入居者のふる里訪問や、入居前からの美容室の利用、馴染みの商店での買い物等、個別に対応しながら、家族の協力によるお盆や正月の外泊や外食支援が行われている。入居者は隣接する保育園児の訪問を日々心待ちにし移動販売車によるパンの購入を楽しみにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係性や個性を理解し、利用者同士がうまく関わりあえるように、職員がさりげなく仲介や調整をし、笑いあって過ごせる様に配慮している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居して、他施設や医療機関にいる利用者にも、入居者や職員が時折面会に行くなど、関係性が途切れないようにしている。家族への声かけをしたり家族からの訪問やお便りもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	時々に応じて、本人の思いを聞き、希望などを把握するように努めている。把握困難な場合でも、思いを汲み取ったり、家族からの情報収集により推し測るようにしている。	職員は日常生活の中で入居者とのコミュニケーションを図り、その時々のお話を大切にしながら発せられた言葉から支援に繋がるようなものがないか検討している。家族の来訪時に入居前の生活の様子を聞き取り、知人、友人から家族の知らない入居者の意外な一面を聞く事で多角的な方面から思いを引き出しプラン作成に反映している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族の面会時に、折に触れ、これまでの暮らしぶりやエピソード等を聞くように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者それぞれのできることでできないこと、わかることわからないこと等を、日々の変化も踏まえながら、観察や会話の中から職員全員が把握するようにしている。また気づきの共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	可能な限り、利用者の意見を取り入れたり、家族との関わりの中で要望を聞いたり、職員全体の意見を反映して介護計画を作成している。状況に応じた見直しについては、記録等でまだ努力が必要に思われる。	本人、家族の思いを中心に担当職員や関係者の意見を集約しプランを立案している。ふる里訪問を支援する入居者へ面会時に家族よりふる里の近況等を話してもらう事で入居者の意識を高めたり、畑仕事や、調理に関わってもらう事で自信につなげる等個々に必要な生活をプランに取り入れている。半年毎の評価により継続や見直しを決定している。	日頃の入居者の様子や記録、毎月のケア会議で支援のずれや方向性の違いが生じた場合等に対応する為見直しの時期を検討し、支援の追加や削除、新たな内容等をプラン上にも追記する事が必要と思われる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づきがあった時、変化があった時等、それぞれの職員が個別記録に記入したり連絡ノートに記入している。「すみれの時間」で、職員全員が情報を共有するようにしている。介護計画の見直しは十分でない。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	個々の利用者のその時々状況やニーズに応じて、できる限り柔軟な対応をするように心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	文化的行事やコンサート・祭り等への参加はしている。ボランティアで舞踊や2ヶ月に1回程度、ハーモニカ演奏等してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の希望を第一に考えているが、ほとんどの方が協力病院を希望されている。定期受診・緊急受診は事業所で行い、専門医の受診については、基本的に家族同行であるが、できない場合は事業所に対応している。訪問歯科診療がある。	入居者の殆んどが協力医療機関をかかりつけ医としており、定期受診をホームで支援し、他科受診の家族対応と合わせ相互の情報共有を図っている。入居後の疾病の発見などがあり、バイタルチェックや協力医療機関・法人の看護師と連携し、異常の早期発見に努めている。又、訪問歯科の導入で新しく義歯を入れられた方など、入居者に合わせ適切な医療受診を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ケアで気づいた情報は、看護職に伝達・相談し、不在時も常時連絡できる体制がある。また、関連病院や併設施設看護師とも日常的に連携し、受診・看護等支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	当福祉村内に協力病院があり、日常的に連携がとれている。利用者や家族も安心して受診・入院できる。日常的になじみの病院職員がいて入院時も退院に向けた支援ができる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方について、事前指定書を作成し、関係者で方針を共有している。地域との関係者については特に例はない。	事前指定書で意志の確認を行い、状況に応じた話し合いを実施している。法人内の特養ホームや関連法人施設との連携で、ホームでの看取りは実施されていないが、入居者・家族の希望に添い、できる限りの支援に努めていきたいとしている。	勉強会などの実施により、職員間の意識向上を図られる事にも期待が持たれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの訓練をはじめ年1回の研修や訓練は行っているが、全ての職員が実践力を身に付けているとは言えない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年3回の定期的火災訓練の他、災害時の研修等行っている。非常時の関連施設との協力体制や地域の運営推進委員との連絡体制はある。地震や風水害訓練は行っていない。	消防署立会いの総合訓練や自主訓練など定期的に避難訓練を実施している。夜間想定訓練では隣接する法人施設職員への協力を要請し、入居者によっては誘導や見守りを手伝われる方もおられる。スプリンクラー・消防署とのオンライン通報機・地域の防災無線などを設置しており、まずは火を出さない事を話し合っている。	以前実施されていた地域消防団との合同訓練の再開や、非常災害時の備蓄についても期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者を人生の先輩として尊厳の気持ちを忘れず接するよう、職員会議等においても意識して取り上げている。また、日常のケアにおいても、利用者の誇りやプライバシーを損ねないような配慮をしている。	年長者に対する敬語での話しかけを基本に、方言を交え馴れ合いにならないように注意を払っている。接遇や個人情報に関する研修を実施し、申し送り時に出てくる個人名は小声で対応したり、トイレ誘導時などのプライバシーへの配慮を行っている。個人情報保護方針の掲示や守秘義務の徹底など情報漏洩防止に取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の個性を把握し、選択したりさりげなくその人らしさが出せるような場面や機会を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の過ごし方の意向も一人一人違うため、できるだけ自由に自分の好きな一日の過ごし方をしてもらっている。自由な散歩や入浴の回数等も個々に応じている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の好みや習慣に合わせた支援や、お出かけや催しの際に、外出着を着たり日頃から化粧を楽しんでいる。時にはマニキュアをつけたりして気分転換の機会になっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑で採れたり家族から頂いた野菜を使った料理をしたり、食事の準備や後片付けも一緒に行っている。時々外食したり個別の外食などをして、変化や楽しみごとを作っている。	法人栄養士の献立を参考に、頂き物や畑で収穫した野菜などを利用し、時にはメニューを変更したり品数が増えたりとその時に応じた食事を提供している。入居者もエプロンを着け台所に立つ方、座位で下ごしらえを手伝うなどできる事を一緒に行っている。状況に応じた食事や形態など個々に応じ、誕生会には家族と共に誕生者の好物メニューを楽しんでいる。収穫した銀杏についての会話が盛り上がり和やかで楽しい食事時間であった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	基本の献立は併設施設の管理栄養士にたててもらい、栄養バランスに配慮している。また、毎食の食事摂取量についても記入し、状態の把握に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々の状態に応じて、毎食後義歯洗浄や歯磨き・うがいなど、声掛けや介助している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけオムツを使用せず誘い排尿している。意思表示が十分できない方は、本人の排泄間隔を把握することにより支援している。はくパンツを下着とパットにする等、個別に検討し気持ちよく排泄してもらえるように配慮している。	安易にオムツに頼らず個々に応じた排泄用品を検討する事で、自立に向けた気持ちの良い支援に努め、退院間もない入居者もトイレでの排泄で以前の表情が戻ってきている。居室に設置されたトイレはプライバシーの確保となり、夜間時もポータブルを使用せず、声かけ・誘導で支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に応じて、朝一番に牛乳や水分を摂ってもらったりしている。なるべく下剤を使わない工夫をしているが、便秘の方に対しては、その人に応じた下剤の服用や食後のトイレ誘導等を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴回数や、介助浴や見守り浴等、個々の希望や状態に即した支援をしている。職員の数や入居者の状態により、希望に応じた入浴ができない事がある。	家庭的なホームの浴室で希望に添い介助や見守りでの入浴を支援している。拒否の方にも声かけのタイミングの工夫で間隔が空かないようにし、汚染時にはシャワー浴などで清潔保持に努めている。しょうぶや柚子などを使用し季節を味わい楽しみの入浴に繋げている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの習慣や個々の疲れ具合等に応じて、安心して休息できるようにしている。寝巻きに着替えてもらい、寝つけない方に対しては話し相手になったりして安心して眠れるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個人毎に保管し、必要時にすぐ確認するようにしている。処方内容が変化した場合は連絡ノートに記入し全職員に周知している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれの利用者の得意なことや知恵や経験などを十分生かせるよう、発揮できる場を日常的に取り入れている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や利用者の希望等に応じて、臨機応変に買物・ドライブ等をしている。家族の協力により墓参りや個別の旅行などに外出されている。また、地域の「お達者会」に参加して外出したりしている。	ホーム前の広大な敷地は法人や関連施設の利用者の散策の場として、天候に合わせて入居者も自由に散歩を楽しんでいる。地域の祭りで職員の踊りを見物したり、コスモス見学では入居者の地元で接待を受け楽しい時間が持たれている。職員と共に買い物や郵便局に出かけ、家族の協力を得た外出や外食など多くの外出の機会を持っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者や家族の希望に応じて預かり金があり、個別に管理し、随時収支内容を確認してもらっている。可能な方は小額所持してもらい、買物時は本人が財布から支払うように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話については、希望時は支援している。身近な人に年賀状を書いたり手紙を書いたりされることに支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花をさりげなく飾ったり、利用者の写真や興味ある物を壁に貼るなどしている。狭いリビング兼食堂のため、食事の準備も見え、食事の匂いを感じたり味見したり、日常的に心地よい刺激がある。	散歩時に入居者が摘んだ季節の花がテーブルに飾られ、整理整頓され使い勝手の良いリビングダイニングは、狭さを感じる事なく入居者もゆっくり食事した後はソファで休憩したり茶碗洗いを手伝ったりと、思い思いの時間が持たれている。廊下にも休憩のスペースが設けられ入居者の写真や作品が飾られている。開設10年を迎えても手入れや掃除が行届き清潔に保たれ、居心地良い共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テラスや玄関・2階のコーナーなどに、いすやテーブル・本などを置き、少人数座って、会話ができるようにしている。ホーム周囲の戸外にも休める場所がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族と相談しながら、使っていた家具や小物や写真等を設置している。利用者に応じて、テレビやじゅうたん・コタツ等も使用している。	既存の建物を利用し一階と二階に分かれた居室は、全ての部屋が南向きでベランダが付いた明るい部屋となっている。クロゼットやトイレ・洗面所が付けられ、自分で掃除をされる方もおられる。其々の馴染みの品々や、生活習慣でじゅうたんにコタツを置かれたり本人が居心地よく過ごせる工夫がされ、外出時の帽子や就寝時に着替えるパジャマが準備されまさしく自分の部屋として大切にされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の理解度や能力に応じて、使い方の張り紙等をして力を発揮できるようにしたり、見守りや声掛けをしてできることを支援している。洗濯や掃除・後片付け・お客様へのお茶出し等してもらっている。		